

グレアム・グリーン の原風景
—— 〈緑色のラジャ張りのドア〉 の現実と虚構 ——

Graham Greene's Scenery:
the Reality and Fiction of "the Green Baize Door"

岩崎 正也*
Masaya Iwasaki

1

1991年4月3日、グレアム・グリーンはスイスのヴヴェーにある病院で亡くなった。86歳と6か月だった。臨終のベッドに付き添っていたドゥラン神父によると、死亡時刻は3日午前11時40分だったという。

その後世界のマス・メディアは一斉にグリーン の死を報じ、作家にたいする毀誉褒貶を含む論評を送信した。『タイムズ』（4月4日付）はその追悼にほぼ1ページを割いた。まず「同時代のイギリス人作家のうちヨーロッパ大陸で彼ほど高い名声を得た人はいない¹⁾」と前置きして、抑制の利いた文章により作家的生涯に詳しく触れたうえで、20年代の一時期にタイムズ社の編集部員を務めたことのある作家の死を悼んだ。6日にはウェストミンスター大聖堂で追悼ミサが行われ、ミュリエル・スパークは、「当然だが、グレアム・グリーンを想うことは今世紀のもっとも優れた文学について考えることになる²⁾」という言葉で弔辞を始めている。また批判的な論評の中では、ジョン・ベイリーが「生き残りを果した者、金銭の亡者、どんな作戦行動にも出たがり、山高帽子、ブッシュハット、鉄兜のどれをかぶっても、その下からのぞく薄青い眼で、喧嘩っ早さと同じく嫌悪の気持を込めて相手を見返す老獪な欲得ずくの人間³⁾」と書いている。これは追悼の趣旨を外れ

た、死者への呪詛とも取れる酷評である。

一方、グリーン の故郷バーカムステッド⁴⁾にあるバーカムステッド・スクールでは、校長キース・ウィルキンソンが4月3日、マス・メディア向けに次の談話を発表した。

グレアム・グリーン氏はバーカムステッド・スクール卒業生の中でもっとも著名な人物の一人でした。父親が校長である頃の生徒だったことは著作の一部で言われているように、グリーン氏にとって幸せな体験ではありませんでした。けれども氏は生涯をとおして、学校と町とにたいし控え目な関係を続けてきました。しかも創立450周年記念祭のある今年、学校訪問を考えていました。氏は最近の学校改革運動の熱心な支持者で、昨年初めて学校の図書館司書と理事の一人をお住いのあるアンティープに呼んでくださったのです。本日のご逝去の知らせはたいへん悲しいことです⁵⁾。

このように晩年になって母校訪問を考えてはいたけれども、グリーンは故郷にたいして、「憎しみと愛という異なる絆によって引き裂かれる⁶⁾」という二重意識を生涯持ち続けていたのである。しかし30歳台に入って、この分裂した意識を統合できるようになったときから、人間の生と死との係わりを描くために、異なる二種の世界を分ける

* 教授

象徴的な「国境」をくり返し表現してきた。たとえば、「庭の下」(‘Under the Garden’, 1963)では、ワイルディッチ少年が屋敷の中の池を渡って入りこんだ島の地下洞窟が、地上の日常と地下の非日常とを隔てる空間的な境目であるとともに、57歳になったワイルディッチの生と死、死から再生という両世界を分ける時間的な境界として示される。小説作品の構造が作者の現実認識の論理に支えられているとすれば、「国境」のモチーフの原型が、グリーンが6歳のとき両親とともに移り住むことになったスクール・ハウスの中の、私邸と校舎の境にある緑色のラシャ張りのドアである、とすることができる。グリーンが『自伝』(A Sort of Life, 1971)の中で、「このバーカムステッドに最初の原型があり、そこから物事が無限に再生されることになった⁷⁾」と記しているからである。だから実在するそのドアを境目とするス

クール・ハウスとオールド・ホールとの位置が、グリーンの現実体験と虚構化の関係を解く鍵であると筆者は考えてきた。

2

グリーンがエッセイの中で二重意識の原風景である<緑色のラシャ張りのドア>について書いた文章は二つある。一つは『掟なき道』(The Lawless Roads, 1939)の「プロローグ」(‘Prologue’)の中に自伝的回想として示される。⁸⁾

エッセイは「13歳の頃だったと思う」という書き出しで始まる。1人称による語り手グレアムの視線は、学校のキャンパスを天空から俯瞰し、自身が潜むクローケイの芝生の周辺を一巡する。すぐにスクール・ハウス二階の北側にある母親のベッドルームに跳び、さらに窓から右下のチャペル、中等部校舎、ディーンズ・ホールに移る。そ

I was, I suppose, thirteen years old. Otherwise why should I have been there — in secret — on the dark croquet lawn? I could hear the rabbit moving behind me, munching the grass in his hutch; an immense building with small windows, rather like Keble College, bounded the lawn. It was the school; from somewhere behind it, from across the quad, came a faint sound of music: Saturday night, the school orchestra was playing Mendelssohn. I was alone in mournful happiness in the dark.

Two countries just here lay side by side. From the croquet lawn, from the raspberry canes, from the greenhouse and the tennis lawn you could always see — dominatingly — the great square Victorian buildings of garish brick: they looked down like skyscrapers on a small green countryside where the fruit trees grew and the rabbits munched. You had to step carefully: the border was close beside your gravel path. From my mother’s bedroom window — where she had borne the youngest of us to the sound of school chatter and the disciplinary bell — you looked straight down into the quad, where the hall and the chapel and the classrooms stood. If you pushed open a green baize door in a passage by my father’s study, you entered another passage deceptively similar, but none the less you were on alien ground. There would be a slight smell of iodine from the matron’s room, of damp towels from the changing-rooms, of ink everywhere. Shut the door behind you again, and the world smelt differently: books and fruit and eau-de-Cologne.

I was an inhabitant of both countries: on Saturday and Sunday afternoons of one side of the baize door, the rest of the week of the other. How can life on a border be other than restless?

「プロローグ」より

してハウス一階にある緑色のラシヤ張りのドアを通過して、学校と家庭との二つの世界を行き来する。

父の書斎の脇の廊下にある緑色のラシヤ張りのドアを開けると、紛らわしいほどよく似た別の廊下に出る。それにもかかわらず、そこは異国の土地なのだ。寮母の部屋からヨードチンキの、更衣室から蒸しタオルの、あちらこちらからインクのかすかな匂いがしていた。ふたたびドアを背にして閉めると、世界は違った匂いがした。書物と果物とオーデコロン匂い。私は両方の国の住人だった。土曜と日曜の午後にはラシヤ張りのドアの片方の住人であり、平日はもう一方の住人だった。国境の上で暮していると不安でないということがあるだろうか⁹⁾。

このようにグリーンは、進級してから自我の分裂にさいなまれることになったスクール・ハウスの見取図を回想する。

「13歳の頃」高等部に在籍していたグリーンは、ある日校内演奏会をずる休みして、クローケイ広場に隠れている。しかしはたしてグレアム少年が、ハウスに住んでいた6歳から13歳頃までの7、8年に及ぶ時間経過と生活空間とを瞬時に意識することができたのだろうか。読者を眩惑させる、書き手と書かれる対象のそれぞれの意識を融合させる、グリーンは技法上の戦略に私たちは注目しなければならない。この文章は、グレアムが学校と家庭の境界であるドアを潜るたびに、自身の意識の上に生じた心象風景を示しているかのように、家庭にたいしては愛情を、学校にたいしては烈しい呪詛の気持を込めて書かれている。つまり現実の自宅からドア一枚を隔てて校舎に通ずる見取図を描いていると見せながら、じつは自我の分裂に悩まされた日常体験を比喩的に伝えている点で、作者の心象風景を表しているのだ。だから現実のモノとしてあるはずの緑色のラシヤ張りのドアは、ここでは二つの世界の境界のシンボルとして用いられている、と読むのが妥当である。

ではこの心象風景をどう読み解いたらいいのか。問題はクローケイ広場に潜んでいるときの、

作者の実際の年齢の前後に連続する時間と、ドアの両側に広がる生活空間とをどのように虚構化したかということである。それを解く資料として、キャンパス平面図¹⁰⁾を持ちだしてみたい。図1は現在のキャンパス、図2-1から2-3はグリーンが在籍していたときのスクール・ハウスの各階平面図、図3は当時のキャンパス見取図である。

3

図面とエッセイとを照合する前に、まずグリーンが在籍期間を公文書によって確認しておきたい。保管されている学籍簿によると、入学は1912年3学期9月、満7歳の終り頃。卒業は22年2学期7月、満17歳。したがって在籍期間は9年9か月から10か月に及ぶ。当時の学事歴は3学期に分れていて、1学期が1月から3月、2学期が4月から7月、3学期が9月から12月の期間だった。グリーンが中等部進学は14年、9歳。高等部のセント・ジョンズ・ハウスに進学したのは18年9月、13歳のときである。

グリーンは『自伝』の中で、バーカムステッド・スクールに入ったのは8歳の誕生日前だということを二度にわたって記している。

私は本を読むことが小学校への入学を予告しているのではないかと恐れた（8歳の誕生日の2、3週間前にあの陰気な門を潜った¹¹⁾）。

私の誕生日は学期が始まった後の10月にくるので、8歳になる前に入学した¹²⁾。

グリーン伝を書いたノーマン・シェリーはこれを追認して、「翌年の9月、8度目の誕生日の直前に父の書斎の向う側の緑色のラシヤ張りのドアを通過してプレパトリー・スクールに入学した¹³⁾」と言う。しかし今も保管されている父親が提出した息子の入学願書の受理された日付は、グリーンやシェリーの記述とは明らかに異なる。

国王エドワード六世グラマー・スクール理事会

私は下記のとおり学校法人にたいしてヘンリー・グレアム・グリーンへの入学を要請します。
チャールズ・ヘンリー・グリーンの子。

バーカムステッド生れ。10月2日で8歳、スクール・ハウスで私と同居。

私は「退学の際まる1学期前に通知しないときは1学期分の寮費（授業料と食費）を支払う」という校則に従います。

署名 C. H. グリーン

親または後见人

職業 校長

住居 バーカムステッド スクール・ハウス

1912年10月12日

No.824 1912年10月17日受理¹⁴⁾

これは保護者である父親が、自身の務める校長職宛てに出した文書である。申請と受理の日付はともに誕生日以後となっているので、筆者はこれまでグリーンもシェリーも入学の期日を間違えていたのではないかと考えてきた。この疑問にたいして、バーカムステッド・スクール図書館司書のバーバラ・エグルズフィールドは次のように返事を寄越した。

生徒は7歳から10歳までならいつでも、普通は9月学期（新学期の始まり）にプレパトリー・スクールに入学できるといえます。これは今でも決まっています。なぜグレアム・グリーンがプレップに8歳になって（でも8歳の誕生日を過ぎたばかりですが）入ったのかは判りません。しかしプレップ・スクールは父親が1913年に創立したのですから、グリーンはもっとも早い時期の生徒だったと思います¹⁵⁾。

学校沿革史は初等部が13年の、チャールズ・ヘンリー・グリーンによる創立ということを書いてある。筆者は94年11月、アメリカのジョージタウン大学でシェリーに会ったときにこの問題について尋ねたが、グリーンが8歳前に入学したという根拠は明かさなかった。そのため長い間グリーンが誕生日を過ぎて入学したということが、学校にたいする不安と拒否反応の表れであると推測してきた。

ところが2001年3月、二度目に学校を訪問したときに、疑問は解決した。長年インセンツのハウス・マスターを務めたディヴィッド・ピアスによ

れば、新年度が始まった直後の10月に、それまで受付けておいた願書を事務上は一括して入学登録の手続きをするのだという。グリーンと同年の12年9月入学生たちの学籍簿綴りを見ると、初等部から高等部までの志願者の年齢に差はあるものの、申請日は12年9月から10月にわたっているが、ほとんどの受理の日付はグリーンの場合と同じ12年10月17日だった。ただ一人だけ16日に申請して、受理が18日という例外はある。したがって実務上入学を10月以前に認められたグレアムは9月新学期から登校していたのである。なおグリーンは成績表は保存期限が過ぎ、廃棄されたという。

4

グリーンが母親のベッドルームの窓から右下の中庭にあるディーンズ・ホール、チャペル、中等部校舎を見下ろすとき、図1によれば、図書館がその視線を遮ることになる。しかしグリーンがいた頃はこの図書館はなく、スクール・ハウスのテラスから北側の中等部校舎の所まで見通しのよい中庭が広がっていた。図書館は中庭を二分する位置に設計され、23年のクリスマス休日に着工、24年9月27日に開館された。

グリーンがメンデルスゾーンを聞きながら、クローケイ広場にいた日はいつなのか。年に3回発行されていた学園誌『バーカムステディアン』(*The Berkhamstedian*)によると、グリーンが高等部に在籍していた18年9月から卒業する22年7月の4年間に校内でメンデルスゾーンが演奏されたコンサートは3回ある。20年12月14日、21年10月1日、22年6月（筆者注、日付は不明）である。このうち土曜日に合致するのは2番目の10月1日だけであり、12月14日は火曜日に当る。しかしグレアムは学校行事からの逃避行動をくり返した結果、ケネス・リッチモンド家に精神分析治療のために預けられたが、そこから初めて母親宛てに出した手紙の日付が21年6月1日だから、問題の日の条件に該当するのは曜日の不一致を除けば、20年12月14日ということになる。シェリーは曜日に触れてはいないけれども、その日を12月14日と断定している。

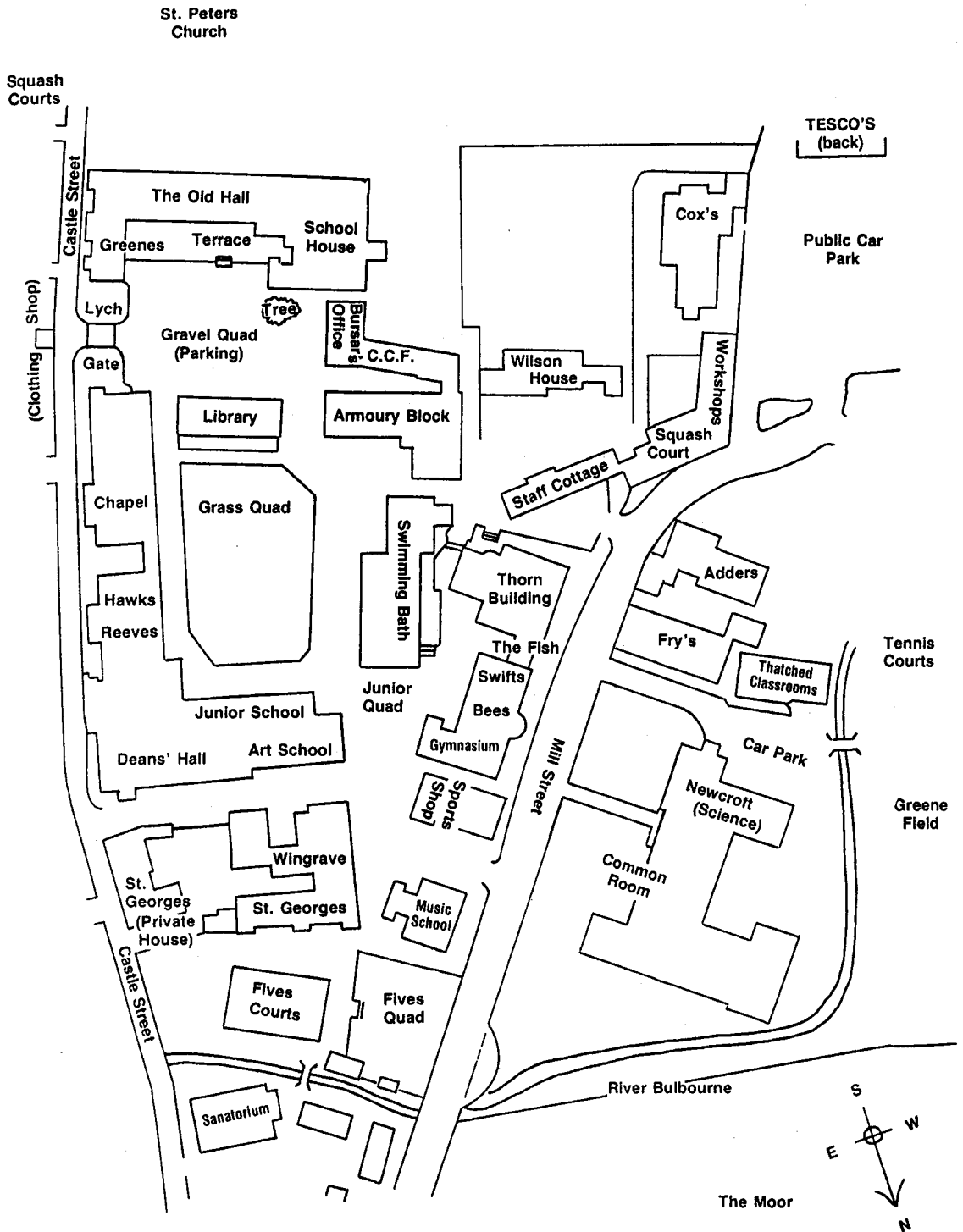
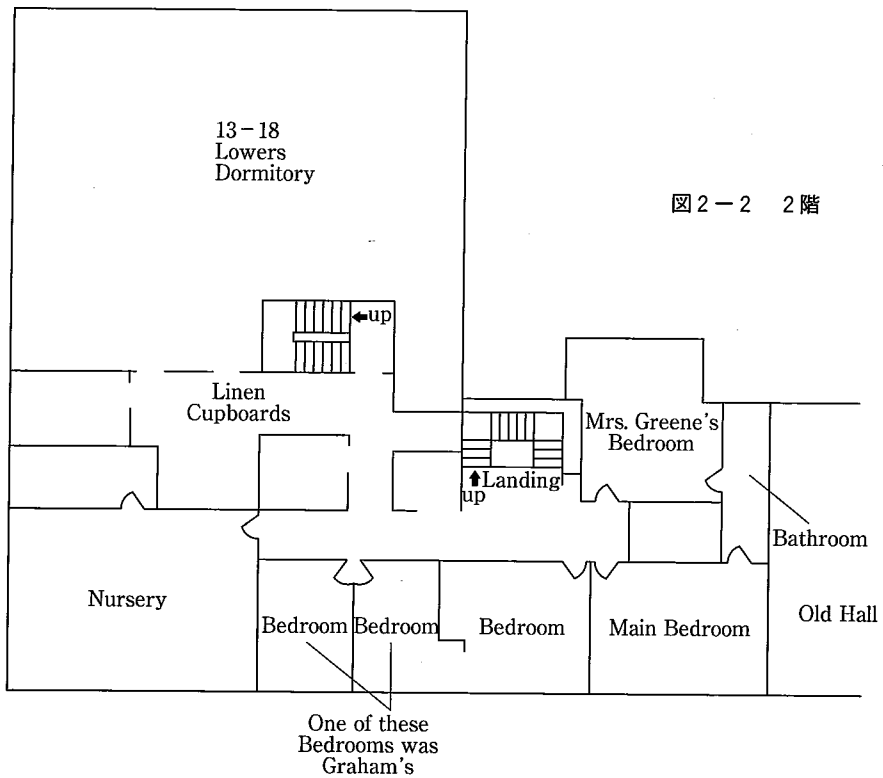
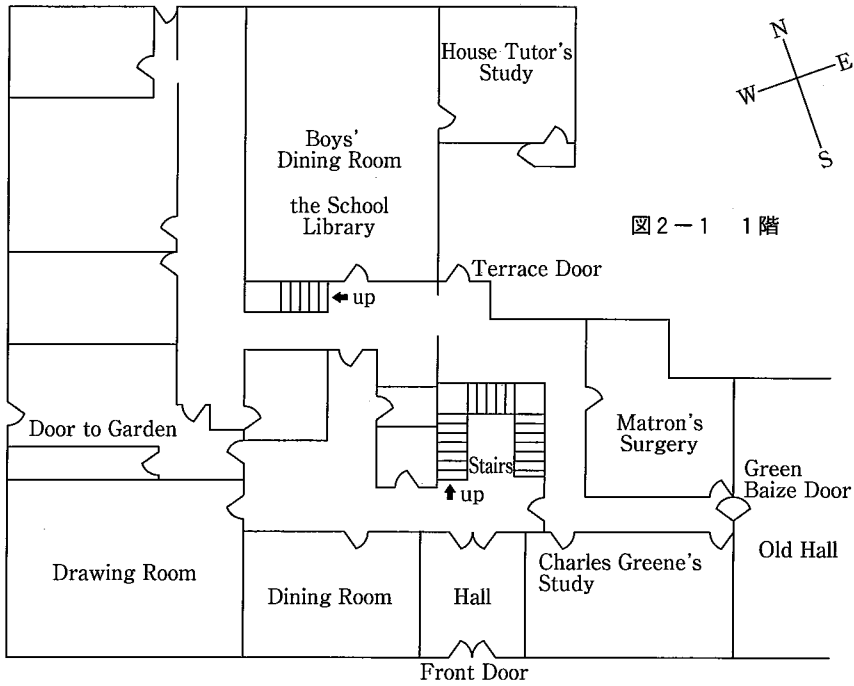


図1 現在のパークステッド・スクール

1910年代のスクール・ハウス



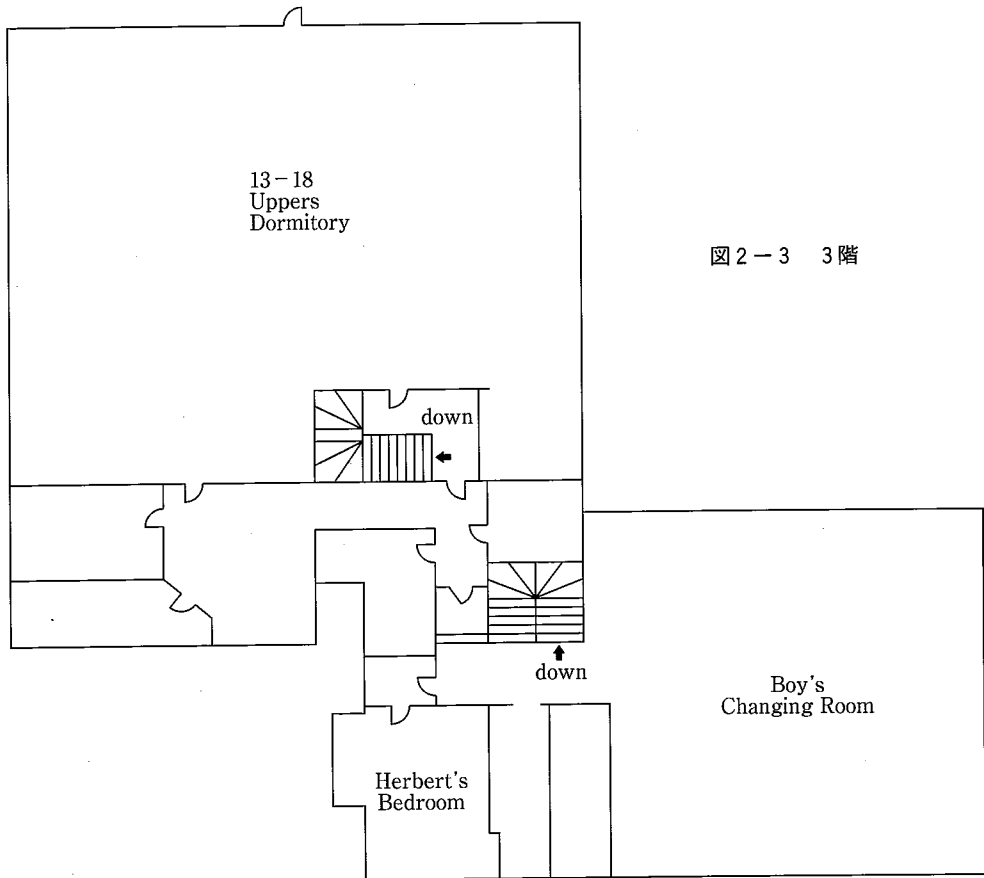


図2-3 3階

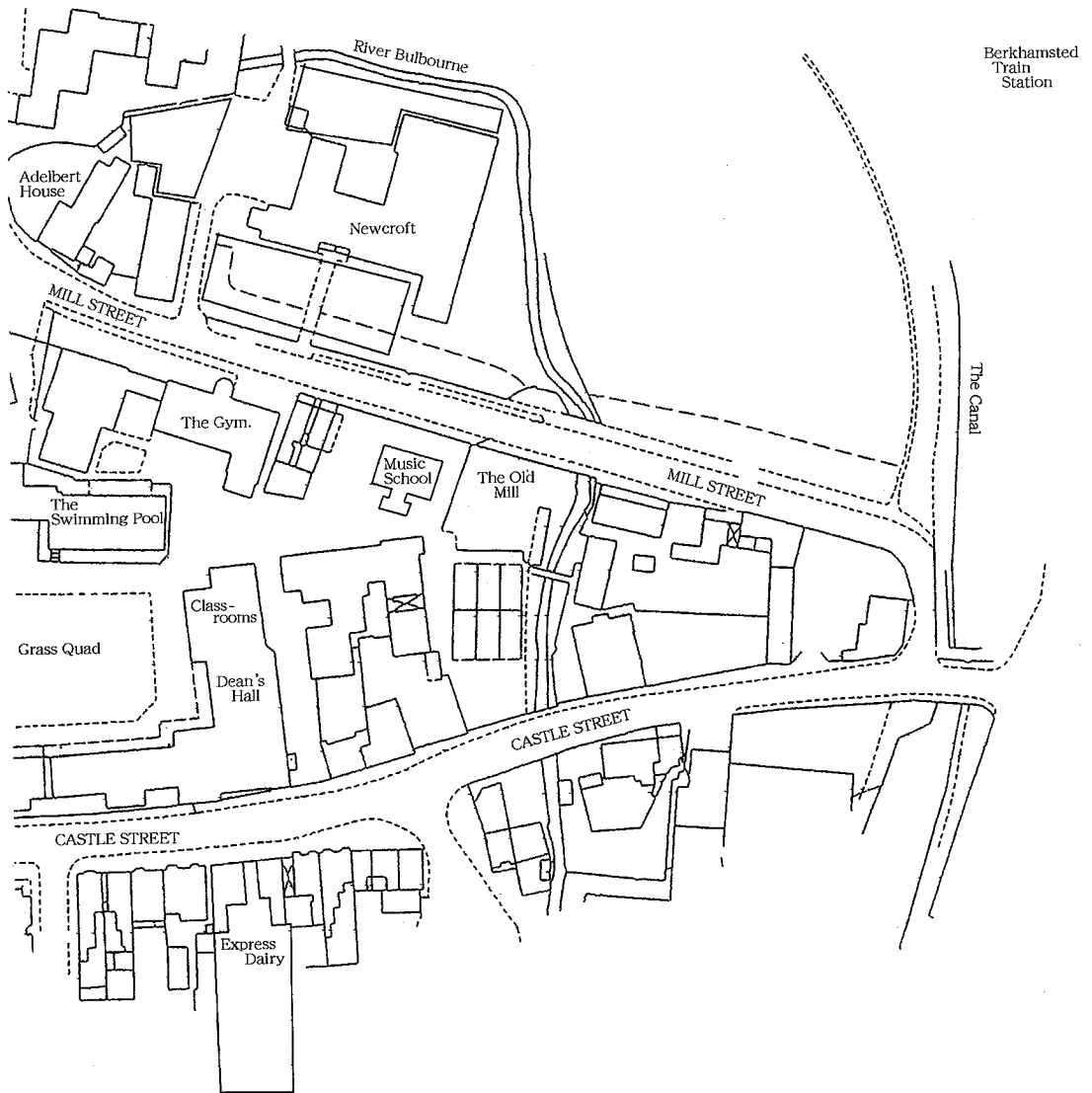
『バーカムステディアン』には当日のプログラム¹⁶⁾が次のように記されている。

1. バーカムステッドのカルメン
2. 「ヘブリディーン序曲」(メンデルスゾーン)、オーケストラ
3. パートソング「ヘラクレイトス」(C. V. スタンフォード)、スウィフト
4. ピアノ独奏、A. J. ヘイ
5. 歌曲「目覚め」(グレアム・ピール)、H. ウィリアムズ
6. パートソング、「サー・エグラモア」(H. B. ガーディナー)、プレイフォードの「プレゼント・ミュージカル・コンパニオン」(1687年作)のメロディーによる。グリークラブ
7. メヌエットとヴァイオリン三重奏曲イ長調 (A. ドルメッチ)、クロナンダー、ホプキンスii、ジョーンズiii、ウエルプリ
8. 歌曲「磁石と攪拌器」(A. サリヴァン)、A. M. オルソン
9. コーラスパレード「トバルカイン」(T. F. ダンヒル)、グリークラブ
10. 前奏曲(ヤーネフェルト)、オーケストラ
11. ピアノ独奏曲「ロンド」(ウェロン・ヒッキン)、W. H. S. ゴア
12. 「アピンガム・フットボール・ソング」(P. ディヴィッド)、グリークラブ
13. ワルツ「田園円舞曲」「ボヘミアン円舞曲」(コールリッジ=テイラー)
14. 四十年先
15. 校歌

このプログラムには講評が添えられている。4



図3 グリーン在籍当時のキャンパス



回のオーケストラ演奏の中で、ヤーネフェルトの前奏曲は、その軽快なメロディーが聴衆の心を捉えたので、大成功を収めた。また子どもたちによるヴァイオリン三重奏は、調子に統一があり、上出来だったと記されている。

コンサートが何時に始まり、何時に終わったかは不明である。グリーンはコンサートに無断欠席して、クローケイ広場に隠れていたのだ。その広場は今はないが、図1の、スクール・ハウスから北西の位置にあるウイルソン・ハウス（46年以降に建設）とその周辺一帯であったことが、図3から了解される。

5

もう一つの〈緑色のラシャ張りのドア〉についての記述は『自伝』の中にある。

校舎は父の書斎の向うにある〈緑色のラシャ張りのドア〉を通り過ぎたところから始まる。廊下は休日に私たちが遊ぶことのできる古いホールに通じ、もう一方の廊下は寮母の部屋とテラスへ続いていた¹⁷⁾。

これは67歳を過ぎて、「憎しみと愛という異なる絆によって引き裂かれ」ていた自我の分裂をすでに克服した作者の冷静な理性により、なんの感情も交えずに記されている。一方、6歳下の弟ヒュー・グリーンは伝記作者マイケル・トレイシーはラシャ張りのドアについて次のように書いている。

スクール・ハウス自体は二つの区画に分れていた。私邸側ではヒューや兄弟姉妹が両親と暮らして、両親の愛情がどちらかといえば遠まわしで、ときどきサディスティックになるメイドがいたにもかかわらず、少しは満足を味わうことができた。一階のチャールズ・グリーンは書斎を越えて、狭くて天井が低く暗い石の廊下の端にある緑のラシャ張りのドアは両方の世界を隔てる国境地帯であった。ヒューはドアの私邸側にいるときはほぼ安心していられたが、そこを通過するといつも、その気分がすり抜けて嫌悪を感じたり、憂鬱になったりした¹⁸⁾。

第三者によるこの客観的な記述は図2の一階図面に合致し、自伝のグリーンによる表現にも酷似する。だから「ヒュー」を「グレアム」に置き換えれば、そこから「プロログ」のドアについての記述を想わせる、グリーンは幼年期を形成する愛と憎しみの世界が現れる。

筆者は一回目の調査後、ハウス・マスターのジョン・デイヴィスンから手書きのハウス内の見取図¹⁹⁾（図4）といくつかの疑問にたいする回答を受取った。デイヴィソンはこの図面の裏に、「これはグリーンが知っていたと思われる見取図を描いたものだ」と記している。自伝の記述は明らかに図4の一階図面の、書斎とドアとホールの三者の位置関係と一致する。だがこの記述が実際の配置に合うかとの筆者の間にたいし、ハウス・マスターは「私はグリーンが書斎のドアの外側にある、互いに直角に伸びている二本の通路のことを言っていると考える。片方はテラスとかつての寮母室に達している」と回答の中で図面との一致を肯定する。

さらに「プロログ」のドアの記述は現実の配置とどう異なるのか。デイヴィソンは「グリーンは現在の見取図に合わない。書斎のすぐ右手の所に別の緑色のラシャ張りのドアがあった可能性がある。けれども私の考えからすると、これは妥当ではない。彼の記憶が間違っていたと思う。細部が、家庭と学校とを隔てる象徴的な境界についての主要な点に影響を与えているわけではない」と述べて、このドアの描写が境界の象徴化を意図したものと指摘している。

当時の間取りを再現した図2-1では、父の書斎には廊下に面した二か所の角に入口がある。現在使われているのは、左側のドアであり、右側は廊下の壁に固定され、中に入ると、元のドアには壁面と同じ色のペンキが塗ってあって、そのかすかな輪郭によりドアの形が識別できる。当時ドアが二か所にあったとしても、「プロログ」に記された〈緑色のラシャ張りのドア〉は現実の再現ではなく、「国境」の隠喩として示されている。

したがって16歳のグリーンがクローケイ広場に隠れていたときに実際に感じたのは、自我の分裂の意識であり、学校と家庭とにたいする二分された忠誠心の葛藤であったはずだ。

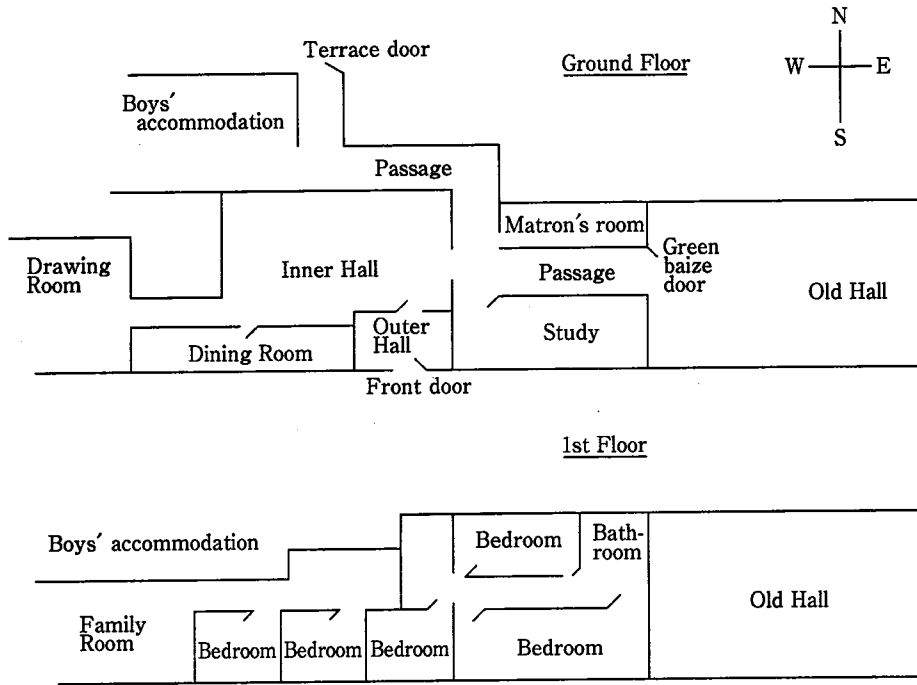


図4 スクールハウス見取り図 (デイヴィスン作成)

「プロローグ」の記述ではドアの向う側(図2-1の東側)が異国であり、こちら側が家庭であるというように、ドアを境目にして生活空間は「内」と「外」とに二分されている。しかし図2-1では向う側にオールド・ホールという教室があるけれども、ヨードチンキの匂いが漂う寮母室はじつは一階のドアのこちら側にあり、蒸しタオルの匂いのする更衣室も三階の東側(図2-3)にある。つまり私邸は全体が家族の住む領域ではなく、学校運営の機能を果す生徒のための部屋がいくつもあった。シェリーは「プロローグ」の「父の書斎の脇の廊下にある緑のラシャ張りのドアを開けると、紛らわしいほどよく似た別の廊下に出る。それにもかかわらずそこは異国の土地なのだ」という言説を次のように考えている。「異国の土地」は、「シベリウス交響曲」の陰鬱な主旋律のようになり返され、そのたびに強く演奏されることになった。異国の土地についてグリーンはしだいに体験を深めていった。異国の土地とは、以前彼が誕生日にケーキの一切れを、贈物として携えて行った寮母の部屋も含まれるが、また古いホール、つまり初期の校舎や、彼と弟ヒューが大きなテーブルを寄せ合って、H. G. ウェルズの

Little Wars に基づく手のこんだ戦争ゲームをして遊んだ校内食堂や、自由に本を手にとって読むことができた図書室もその範囲に含まれていた²⁰⁾と述べて、グリーン意識の中にある異国の例を四つ挙げている。

そのうちの食堂や図書室は図2-1の一階の私邸側にあり、二、三階の寮生たちの部屋も私邸内の異国だった。またハウスの外の異国の領域には、朝の礼拝が行われるディーンズ・ホールがあり、さらに町のハイ・ストリートの南側にはグリーンにたいして「追われる」意識を刻みつけたセント・ジョンというハウスがあった。また「プロローグ」第三段落の「土曜と日曜の午後にはラシャ張りのドアの片方の住人であり、平日はもう一方の住人だった」という記述は、グリーンが18年9月、自宅通学生からセント・ジョンに寮生として入った13歳以後の体験を描いている。それ以前とは異なり、寮生のグリーンは、日曜ごとに寮から自宅に帰るのにラシャ張りのドアを通る必要はなくなった。ハイ・ストリートから左折してキャッスル・ストリートを下り、セント・ピーターズ教会の裏手にある墓地と、赤煉瓦のチューダー式のホールとの間の低い小道を通過して、ス

クール・ハウスの玄関を潜ればよかったからである。このようにグリーン我的生活範囲がスクール・ハウスからセント・ジョンズ・ハウスへと広がったために、日常の国境線は緑色のランヤ張りのドアから屋外のクローケイの芝生へ移動したのだ。

6

グリーンが67歳のときに出版した『自伝』の語り口について、書くグリーンと書かれるグリーンとの存在を指摘したのはイアン・グレガーである²¹⁾。グリーンは、自伝が自己の臨終を取り扱うことができない以上、「どんな結末も恣意的な(arbitrary)ものにならざるをえない」と言う。だから自伝を26歳から28歳頃の3年間に味わった失意の時期で閉じたのも、「失敗もまた一種の死だ」からである。自伝の前半は、「追われる」存在として苦悩に充ちたバーカムステッド・スクールの寮生時代の体験から、後半はジャーナリストから作家に転じた頃の回想から構成されている。自伝の主人公であるグレアムは、作者グリーンに敵しい視線にたえず曝され、プロの作家として登場する。しかし読者が知りたいと思う二児の父としてのグリーン、カトリックへの改宗の真の動機、妻や子との家族関係などの事情はほぼすべてが排除されている。記述の中にグリーン制作意欲をかきたてる「幼年時代、倦怠、反復的な失敗の意識」などのオブセッションの心象風景ばかりが充満するのは、自伝の中で作者としての注釈や選択の権利が行使されているからである。そのためグレガーは、この『自伝』を「一種のフィクション」(“a sort of fiction”)と規定する。この意味で、書くグリーンと書かれるグリーンとの力学関係——自伝体の技法は「プロローグ」の記述にも発揮されている。語り手の内面にあるのは16歳のグリーン意識ではなく、自我の分裂を統合できるようになった35歳の作者自身の意識である。このように書くグリーンと書かれるグレアムとの微妙な関係が成り立つ点で、この「プロローグ」はグリーンによる一人称小説の語り口の要素を先取りしたということができる。

注

- 1) *The Times*, 4 April 1991.
 - 2) *Tributes to Graham Greene OM, CH 1904-1991* (London: Reinhart Books, 1992), p.15.
 - 3) John Bayley, “John Bayley Writes About Graham Greene,” *London Review of Books*, 25 April 1991.
 - 4) グリーンが生れてから17年間を過ぎたバーカムステッドはロンドンの26マイル北西にある、人口約16,500人の小さな町である。その中心部を南東から北西にかけて貫く幹線道路A4521がハイ・ストリートである。これと平行してすぐ北側をグラント・ユニオン・キャナルという運河が流れ、さらにその北にはイギリス鉄道ロンドンーグラスゴー線が町並みと並走する。互いに平行する三種類の交通路線のそれぞれの距離は約200メートルあり、学校の裏手にはバーカムステッド駅がある。ロンドンのユーストン、バーカムステッド間は特急により35分で結ばれている。
 - 5) 1993年6月6日から一週間バーカムステッド・スクールの調査したときに、司書のバーバラ・エグルズフィールドから提供される。
 - 6) Graham Greene, *The Lawless Roads* (1939; London: Bodley Head, 1978), p.2.
 - 7) Graham Greene, *A Sort of Life* (London: Bodley Head, 1971), p.12.
 - 8) Greene, *The Lawless Roads*, pp.1-2.
 - 9) *Ibid.*, pp.1-2.
 - 10) 2001年3月19日から5日間学校を二度目に調査したとき、インセンツの元ハウス・マスターのデイヴィッド・ピアスから提供される。図面作成者は学校の保守管理部門のレイ・グレイ。
 - 11) Greene, *A Sort of Life*, p.23.
 - 12) *Ibid.*, p.61.
 - 13) Norman Sherry, *The Life of Graham Greene: Volume One 1904-1939* (London: Jonathan Cape, 1989), p.16.
 - 14) 一回目の学校調査のとき、エグルズフィールドから提供される。
 - 15) エグルズフィールドから筆者宛ての1993年11月9日付書簡。
 - 16) Berkhamsted School, *The Berkhamstedian* No.219 (March 1922), p.21-22.
 - 17) Greene, *A Sort of Life*, pp.60-61.
 - 18) Michael Tracey, *A Variety of Lives* (London: Bodley Head, 1989), pp.8-9.
- 父親の書斎とオールド・ホールの位置関係は今もグリーンとの頃と変わっていないが、トレイシーが見て書いた83年当時の「暗い石の廊下」はすでに明るい色のリノリウムに改修されている。そのため二度にわ

たり筆者が見たときの印象では、ラシヤの一部が剥がれ落ち、木目が露われて黒ずんだ「緑色のラシヤ張りのドア」は近代的な内装を施された天井、側壁、床面の明るさとはまったく調和しない佇まいを示していた。

19) 1993年のパーカムステッド・スクール調査のときにスクール・ハウスのハウス・マスターのジョン・

デイヴィスンから提供される。書簡は1993年10月23日付の筆者宛てのもの。

20) Sherry, *The Life of Graham Greene: Volume One*, pp.33-34.

21) Ian Gregor, "A Sort of Fiction", *New Blackfriars*, 53 (1972): pp. 120-124.